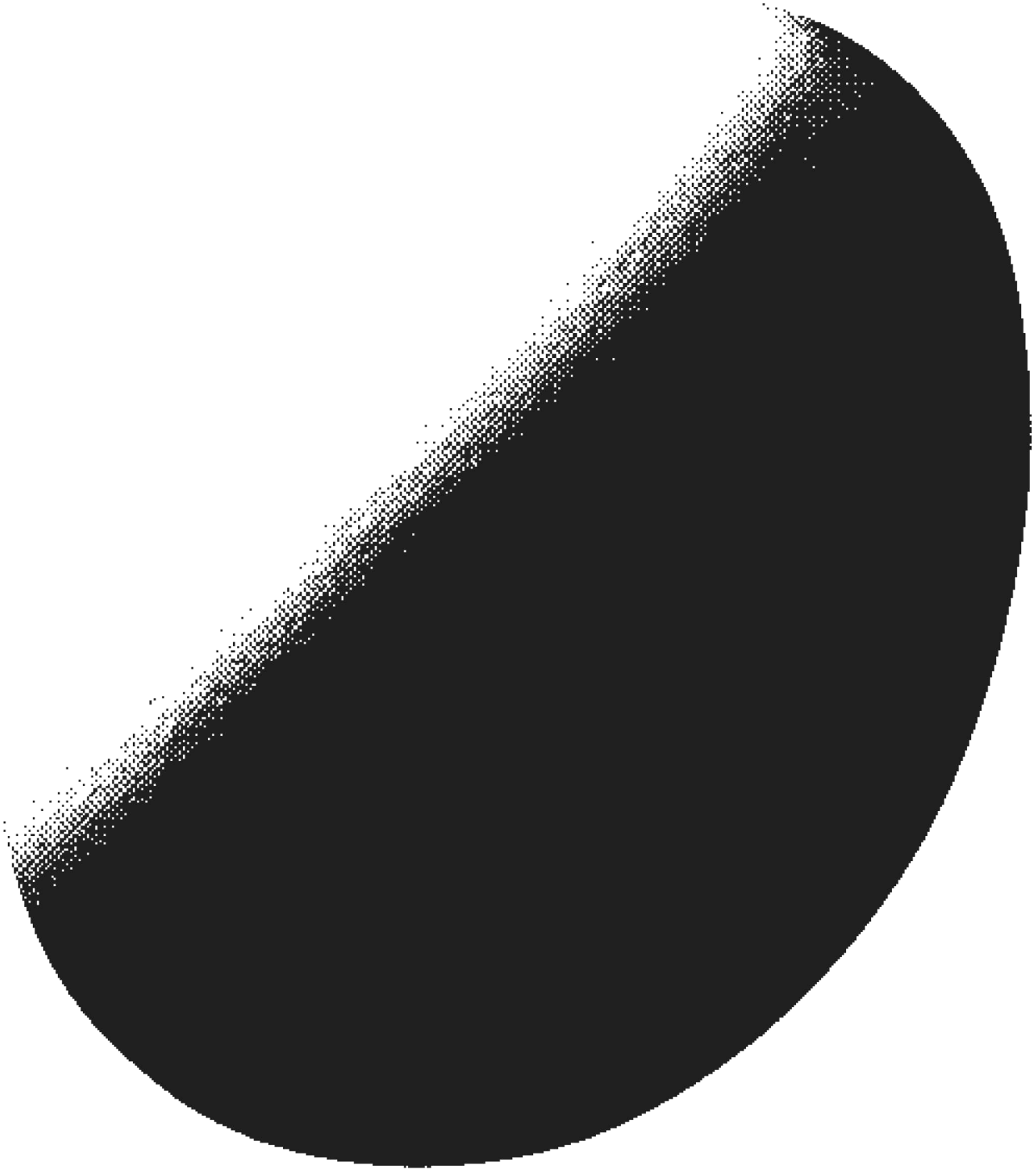


David Toop & Ania Psenitsnikova

Moreskinsound workshop
Introduction to soundbody improvisation

プリズム 国東半島 リトリート合宿 2025 ／モアスキンサウンドワークショップ／サウンドボディ即興演奏入門

イギリスの音響思想家・研究者として『Ocean of Sound』など著作多数、音楽家としてBrian Enoと共にアンビエントミュージックを開拓、即興演奏家として坂本龍一とアルバムを発表するなど多岐に渡るアーティストDavid Toop、エストニア出身のビジュアル・パフォーマンス・アーティスト、キュレーター Ania Psenitsnikovaの２人が、教育者として世界各地で実施している３日間のワークショップを、神秘的な歴史と自然が奥深い国東半島の史跡にて開催します。
自然豊かな美しい聖地のロケーションでキャンプをし、シンプルで健康的なまかない食事を共にしながら、自然・現象・儀式と深く共鳴し、沈黙・聴取・即興による表現を追究してきたDavid ToopとAnia Psenitsnikovaによるナビゲートでワークを受講します。プログラムの中には、歴史的な史跡や古代からの祭礼の場への探検＆ワークがあったり、土曜の夜には黒人音楽のグルーヴをテーマとしたDJパーティーが開催されたり、最終日はホール会場で催される音楽イベントに、即興演奏とパフォーマンスで出演しワークの成果を披露する発表の機会として参加します。
新しい体験・発見・学びと、創造的なリフレッシュ・浄化・エネルギーチャージ、奇跡的な出会いと交流などが複合的に交差する、かなり斬新で実験的なリトリート合宿。禅や瞑想のような、マジカルな時間を国東半島で共に過ごせたら幸いです。

会期　10/3金−10/5日
集合時間　10/3　13pm
終了時間　10/5　16pm頃（イベントは21pmまで）
場所　大分県国東市国見町エリア
参加費　33,333円
限定30名
2泊3日、ワークショップ会期中の全食事付き
テント・マット・寝袋など持参してキャンプ場にて宿泊可／車中泊可／前日と後日の延泊可

10/4±18−25pm　旧権現崎キャンプ場（PRHYTHM "Obsidian Groove" 前夜祭）と10/5日 13−21pm　国見町みんなんかんホール（PRHYTHM "Ocean of Sound"）の音楽イベント参加チケット付き

〇交通費・レンタカー費用などは各自で負担をお願い致します〇キャンプが苦手な方は、近隣のホテルや民宿を各自で予約・宿泊してプログラムに参加していただけます〇テントや寝袋などが用意できない方は、若干ですが別途レンタル可能ですのでご相談ください〇通訳者がいますので、英語が苦手でも参加できます

募集にあたって、メールにて募集要項にご記入いただき、簡単な審査と抽選にて選考します。プリズム出演者関係者に優先的な先着順受付枠がございますので、お早めにご連絡いただければ幸いです。まずは参加希望のメールをお早めに送信ください。　info@prhythm.org

サウンドボディ即興ワークショップでは、感覚を通して身体の可能性を引き出し、即興、パフォーマンス、反省、議論を通して身体、空間、素材の物理的性質を探ります。自由、コントロール、自発性、相互性、習慣、そして何よりも他人、自分自身、そして私たちがいる空間に耳を傾けるという問題について考え、取り組みます。
即興が実際に何を意味するのか、それがリスニングとムービングの実践にどのように適用されるのか、そしてそれが私たちの日常生活にどのように適用されるのかを尋ねます。
共同で作業することで、グループはオブジェクトを個人の記憶と未知の可能性の両方につながるダイナミックで生きた存在として考えます。日常の素材は身体の動きの延長となり、楽器に変わります。
リスニングの実践、音を使った呼吸、さまざまな種類の身体表現の練習は、グループ練習の発展に役立ちます。これは**ダンスや音楽に関するワークショップではないことをお伝えしておくことが重要です。身体の動き、リスニングの実践、音を使った即興の密接な関係を探りたい人なら誰でも参加できます。**サウンドボディ即興の目的は、動きと音の即興に対する自信を高め、感覚を強化し、空間に対する感受性を高め、自律性と個性を発達させ、包括的なグループ言語に向けて取り組むことです。

サウンドボディとは？

サウンドボディとは、共鳴し、聴き、動く存在であり、内なる世界と外の世界を丹念に観察し、感覚の潜在性、身体性、静けさと向き合い実験を重ねていくものです。微細な極小音(マイクロサウンド)と、意図に頼らない動きが持つ可能性を通して、空間の中で“存在すること"への、調和的で自然なアプローチを探っていきます。最初のステップは、深く集中して“聴く”ということ。けれども、その“聴く”という行為は、耳を通した聴覚を超えて、身体全体で感じ取るものへと、ゆるやかに拡がっていきます。動き、注意、気づき、呼吸、内なる音に耳を澄ます、音の即興といったエクササイズを通して、私たちは、“空間”や“自らの身体”、そして“他者”との関係性の中で感じられる瞬間の体験に深く調和・共鳴していきます。そしてそのなかで、感覚をより繊細に研ぎ澄ませながら“聴く感性”を育んでいきます。

私たちが尋ねる質問

身体はどのようにして静かに外の世界に適応できるか？　空間内での動きと音について学んだことをどのようにまとめればよいか？　沈黙と静寂の中でどのように働くか？　どうすれば身体的および空間的認識を高め、存在感を拡大できるか？　楽器をどうやって探すのか？　言葉やイメージではなく、身体の状態で考えるために、身体的な想像力をどのように活用すればよいか？　音楽の即興演奏の経験と、身体反応および身体的想像力の訓練をどのように組み合わせるか？　他の動物、実体、無生物との関係において、人間の固有受容覚と内受容覚の認識を探求する方法とは？　微細な音や微細な動きに飛び込んで、空間、自分自身の身体、そしてお互いとの関係における存在体験を強化するにはどうすればよいか？

Manifesto

1. Improvisation: responsive, sensing, alert.
   即興：感じ、反応し、注意深く今を察していること
2. Listening within the total body.
   全身で聴き、感じ、受けとる
3. Space has its own intention.
   すべての環境空間はその場の意図を自らのうちに示す
4. Intimacy: mutuality with materials, space and bodies.
   親密さ：物質、空間、身体との間に生まれる相互作用
5. Ecologies, resonances of inter-dependence.
   生態とは、関係性の中で生まれる響き

6. Stillness and silence, breath and the imperceptible threshold.
静寂と沈黙、呼吸や知覚できない境界のうちに在るもの
7. Resonance, happening from a distance.
共鳴とは、離れていても響き合うもの
8. Presence, bringing air to materials and space.
存在とは、物質と環境空間に息を吹き込むこと
9. Becoming, entering the knowledge of undefined.
「なる」とは、言葉にならない知の領域があらわれつつあること

David Toop　デイヴィッド・トゥープ

作曲家／ミュージシャン、作家，キュレーター。1970年よりサウンド・アート、聴取体験（listening practice）や即興音楽、サウンド・インスタレーション、ヴィデオ作品、フィールド・レコーディング、ポップ・ミュージック、テレビ音楽、舞台作品などの幅広い分野で活動している。著作 に『Rap Attack: African Jive to New York Hip Hop』（1984）、『Ocean of Sound: Aether Talk, Ambient Sound and Imaginary Worlds』（1995）、『Exotica: Fabricated Soundscapes in a Real World』（1999）、『Haunted Weather: Music, Silence, and Memory』（2004）、『Sinister Resonance: The Mediumship of the Listener』（2010）があり、これまで11の言語に翻訳されている。うち『Ocean of Sound』は邦訳『音の海――エーテルトーク、アンビエント・サウンド、イマジナリー・ワールド』が2008年に水声社より刊行されている。主なソロ・アルバムに『New and Rediscovered Musical Instruments』（マックス・イーストレイとの共作、1975）、『Screen Ceremonies』（1996）、『Black Chamber』（2003）、『Sound Body』（2007）など。批評家，理論家としては、『The Wire』『The Face』『Leonardo Music Journal』『Pitchfork』『Bookforum』などの雑誌へ数多く寄稿している。キュレーションした展覧会に、「Sonic Boom」（ヘイワード・ギャラリー、ロンドン、2000）、「Playing John Cage」（Arnolfini、ブリストル、2005）、「BLOW UP」（Flat Time House、ロンドン、2010）。また「Radical Fashion」（ヴィクトリア＆アルバート美術館、ロンドン、2001）のサウンド・キュレーター、クラフツ・カウンシルが組織した巡回展「Sound Matters」（2013―）のキュラトリアル・アドヴァイザーを務めた。その他、2012年にオペラ《Star-shaped Biscuit》を上演。また2013年11月にはアラスデール・ロバーツ、シルヴィア・ハレット、ルーク・ファウラーとの共同作品《Who will go mad with me》を発表した。坂本龍一との即興演奏コラボ作品を2021年にリリース。『Garden Of Shadows And Light』現在は、新著『Into the Maelstrom: Improvisation, Music and the Dream of Freedom』を執筆中のほか、アーティストの中島吏英と「Sculpture」というイヴェントを企画、開催している。ロンドン芸術大学教授。

Ania Psenitsnikova　アニア・プセニツニコワ

エストニア生まれ。ビジュアル・パフォーマンス・アーティスト、キュレーター。フラヴィア・ギサルベルティ、若松萌乃、岩名正樹、吉本大輔らと共に舞踏を学び、旅を重ねた。1996年より独学で音楽を学び、2011年からは空中アーティストとして活動。2015年から現在に至るまで、ダリア・アパコンチッチと共同で4カ国で7つの展覧会を共同キュレーションし、検閲現象を探求するとともに、エストニアの「Party of the Dead」プロジェクトやエコロジカル・フェスティバル「Grow and Decay」など、パフォーマンスやイベントに参加。展覧会「One Can Not Be Too Careful, Feminist Edition」は、2018年ブライトン・フェスティバルで最優秀ビジュアルアート賞を獲得。

Moreskinsound

音楽家のデイヴィッド・トゥープと舞踏家のアニア・プセニツニコワによるデュオ。静寂の極限を探求し、空間、存在感、そして断続的な沈黙と動きの強烈さと、それらが身体に与える影響を探求している。彼らの作品は、拾った物や楽器、フルート、空中移動、そして「無動作」を用いたライブパフォーマンスを網羅している。2023年以降、ロンドン国立美術館、プラハ、バーゼル、タルトゥ、シドニー・ボリューム・フェスティバル、クリスチャンサン・プンクト・フェスティバル、エディンバラ、グラスゴーなどで公演。「インアクション」と称される非公開イベントは、オーストラリア・コーンウォール、ノルウェー、タイ・クラビのコウモリの洞窟、エストニアの古代の静寂に包まれたヴィル泥炭湿原などで撮影収録された。
www.moreskinsound.com
instagram.com/moreskinsound

Schedule

10.3 金

09:00−12:00	David Toop & Ania Psenitsnikova “Moreskinsound” によるパフォーマンス＆映像撮影（前日入りした方＆朝早くに到着される方は見学可能）
13:00−18:00	集合／ Workshop
18:00−19:00	夕食
	自由行動（温泉など）

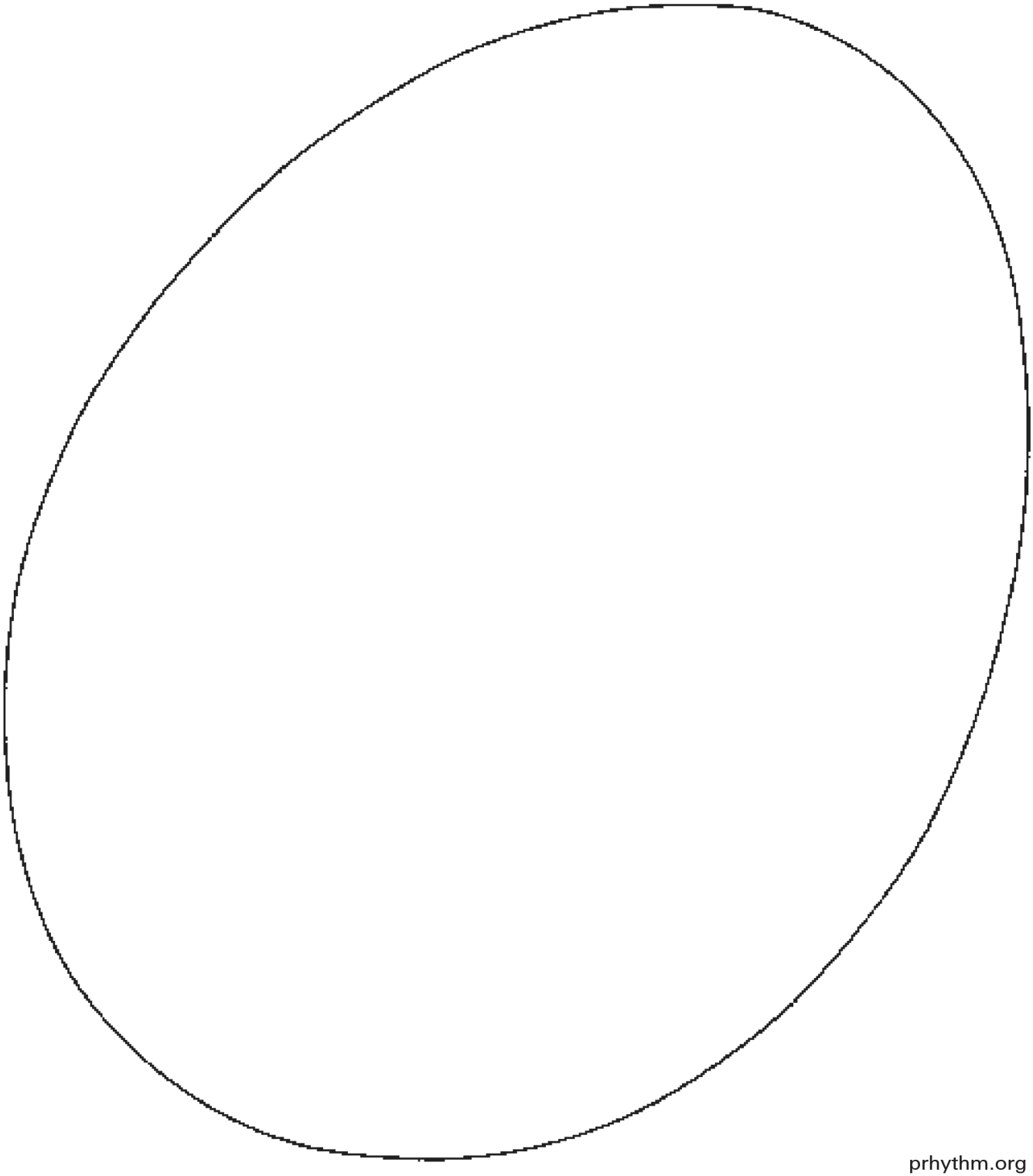
10.4 ±

07:00	起床
08:30−09:30	朝食
09:30−12:00	Workshop ／散策など
12:00−13:00	昼食
13:00−16:00	Workshop ／散策など
16:00−18:00	休憩 温泉など
18:00−19:00	夕食
18:00−25:00	PRHYTHM “Obsidian Groove” DJ Party （自由参加・一般の方も参加します）

10.5 日

07:00	起床
07:30−08:30	朝食
09:00−12:00	みんなんかんホールにて Workshop ／リハーサル
12:00−13:00	昼食
13:00−21:00	みんなんかんホールにて PRHYTHM “OCEAN OF SOUND + Moreskinsound” （前半に出演・16時頃から解散可）

詳しくはwww.prhythm.org



prhythm.org

PRHYTHM KUNISAKI ReTreat 2025

2025 10.3—5